平成３０年度　きのさき見て歩き　　第１回

「温泉寺参拝と城崎文学碑巡り」

実施日　　平成 30 年 6 月 1 日（金）　午前 9：30～15：00
講　師　　坂田　文一郎氏　（城崎文化協会会長）

＜地蔵湯　白鳥省吾文学碑＞

明治 23 年生まれ、民衆詩の詩人白鳥省吾の歌碑。昭和の初めごろは橋のたもとで蟹を売る光景が見られた。紀行文「旅情カバン」に収められている歌。

「雪の城の崎あの子の髪に溶ける淡雪わがこころ」

＜柳湯　富田砕花文学碑＞

富田砕花歌碑

「城崎のいでゆのまちの秋まひる青くして散る柳はらはら」

中国の西湖から移植した柳。坂田講師によると、春先には柳の芽吹きの２、３日後に向こうに見える風景が黄緑色にみえる日があり大変美しいそうだ。

＜一の湯　与謝野鉄幹・晶子文学碑＞

与謝野鉄幹と晶子の文学碑が足湯の奥にある。

昭和５年、２人は山陰地方を旅行し、城崎に宿泊。失意の鉄幹を晶子が支え励ましていた時期。

手前の「海内第一泉」はわが国で初めて温泉を治病に用いた名医後藤艮山（こんざん）の遺志を継いだ香川修庵が、その著書『一本堂薬選』に城崎温泉を「海内第一泉」と紹介して以来昭和に至るまで城崎温泉が称えられているとして、医学博士藤波剛一の撰文で作られたもの。（昭和 37 年建立）

「御所の湯」の名の由来は鎌倉時代に御堀川天皇の姉にあたる安嘉門院が入湯したことによる（「増鏡」）。

御所の湯前の句碑「梅の香や御所の湯あみの女から」は大津三井寺の塔頭円満寺の住職西坊千影の作。

＜温泉寺　木造十一面観音立像ほか＞

温泉寺持仏堂で、小川祐章住職から 1200 年前に作られた千手観音像に関するお話をうかがう。千手観音像は手が 40 本ほどあれば千手観音像と呼ばれるそうだが、温泉寺の千手観音像は実際に千本の手を持った観音様だったらしく大変珍しいそうだ。年月の経過の中で何本かは失われたが、今でも 834 本あるという。

＜本堂＞

温泉寺本堂は今から約 600 年前に建立された密教建築である。格子間や格天井といった特徴を持つ。太い柱は当時のものをそのまま使用しているが、床などは一部新しく張り替えられており、床板の継ぎ目などが均一でないのはそのためである。

＜ご本尊十一面観音立像＞

33 年ぶりにご開帳になった木造十一面観音立像。中彫といってお顔の表面に鑿のあとが見える。言い伝えでは天平時代の仏像とされるが、平安初期のものという説が有力であった。しかし近年の研究では耳の大きさなど天平期の仏像の特色を備えていることから、やはり天平時代の作ではないかとみる学者もいる。

御手の長いのが特徴であり、多くの人々を救いたい観音様の慈悲の現れであるという。

十一面観音立像の御手に結ばれた五色の紐は本堂の外で白い紐と結ばれており、この紐は山門まで続いていた。

この紐に触れば、本堂まで上がることのできない人でも観音様に触れることができるそうだ。

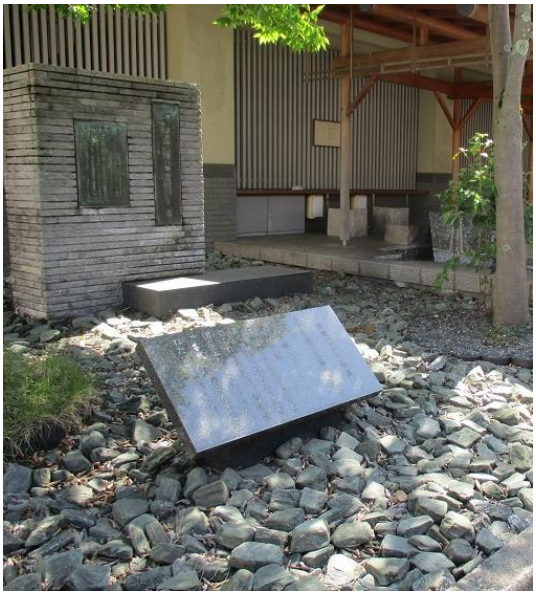
＜吉田兼好歌碑＞

温泉寺山頂にある吉田兼好歌碑。
城崎には元弘元年（1331 年）ごろに訪れた。
湯治は二方の湯（湯村温泉）に対し、但馬の湯といえば、城崎温泉のことだった。
「しほらしよ山わけ衣春雨に雫も花も匂ふたもとは」

＜有島武郎文学碑＞

温泉寺薬師堂前に有島武郎の歌碑がある。
大正 12 年、鳥取講演の帰途城崎にきて 3 日間宿泊。そのときに詠んだ歌「浜坂の遠き砂丘の中にして侘しき我を見出でつるかな」が刻まれている。
トライやるの中学生が、有島が城崎の若葉の風景が大変気に入ったと友人に宛てた手紙を朗読。

＜志賀直哉文学碑＞



城崎文芸館前の志賀直哉文学碑。
この文学碑建立に尽力した当時の観光協会長鳥谷武一に直哉が寄せた城崎の賛辞をトライやるの中学生が朗読。
直筆の署名直哉の哉の字は点が一つ抜けており、これは字のバランスが悪いからと志賀直哉があえて書かなかったという。